

# パラグアイにおける東京農大校友・移住小史

東京農業大学校友会パラグアイ支部

1999年7月

【】部分は2015年に付記したもの

私たちが移住したパラグアイ国を簡単に説明すれば、南米大陸の内陸中央部に位置し、海には接せず国境はブラジル、アルゼンチン、ボリビアに接しており外洋への出口は1000kmにのぼる陸路か大河を利用するしか無い。気候的には亜熱帯および温帯に位置し、緯度は南回帰線上にある。面積は40万キロ平方と日本より少し広いが、人口は500万人【2014年には約750万人】といわれている。年間の平均気温が22度強、最高気温が41度、最低がマイナス6度程度で、雨量の年間平均は全国平均で1455ミリ、東部地方は1800ミリ、西部チャコ地方は350～1200ミリである。

人種的には1537年のスペイン人到来以前はインディオ・グアラニー族が中心であった。現在はグアラニー族とスペイン人の混血が人口の90%強を占めている。国語はスペイン語とグアラニー語の二つが公用語である。国教はカトリックだが、信仰の自由は認められている。

1811年の独立後、パラグアイ国は南米の強国で、鉄道敷設は日本に先駆けている。しかし、1863～68年の無謀な三国戦争に負けて、領土の過半と多くの人口を失い現在の小国になった。

経済の主体は農牧林で主な産物は大豆、綿花、皮革製品、木材、落花生、キャッサバ、トウモロコシ、マテ茶、植物油、タンニン、砂糖、野菜などである。【その後、牛肉、小麦、米、ゴマ、ステビアなども生産が増加】国民の大半は低所得者で国の税収入の大半は輸入税、物品税である。【後年、流通税、個人所得税を導入】国家経済の赤字は恒常化している。

メルコスール（南部共同市場：ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイの4カ国で1991年発足、その後ベネズエラ、ボリビアも加盟）の本格的始動と共に、国内産業の競争力の脆弱さが明らかにあり、輸出減少、為替の低下、物価上昇、金融機関の混乱、失業者の増加、社会不安の増加とマイナス面が目につく最近である。

【2000年以降、BRICSと言われる中国・ブラジルを初めとする新興国を中心とする世界的経済発展が主流となると、南米の内陸小国パラグアイは近年、その豊富な土地資源・人的資源により、新たな食料生産基地、安価な若年労働力の提供地として脚光をあびてきている。】

## 1) 校友の移住小史以前：

パラグアイの日本人移住の歴史は 1936 年の第一回ラ・コルメナ移住で始まり、1996 年には移住 60 周年記念式典が行われた。1936 年以降、1941 年に太平洋戦争が勃発して移住が中止されるまでに計 125 家族 780 人がラ・コルメナに移住をしたが、1955 年の戦後移住再開までに約 15 年の空白がある。

その間、特に戦争中、パラグアイ国は連合国側であり、母国日本とのつながりも途絶え、敵国人として扱われたコルメナの日本人移民の苦労は計り知れない。戦後もラ・コルメナ移住地は首都アスンシオンから 130Km ほど離れ、鉄道を利用してアスンシオンに出るのも戻るのにも一日仕事という交通の不便さ、また度重なる現地政権の変遷により地方でのゲリラ活動の多発、イナゴ大群の来襲などにより、移住者の多くがブラジル、アルゼンチンに再移住して行った。一時は、「コルメナに残る人は、移動する金が出来ない人だけだ」と言われた時期もあった。

しかし、残された人々の中からやがて、「今日よりは明日、明日よりは明後日を少しでもより良くしよう」、「どんな農業でも、今年より来年、来年より再来年と拡大再生産出来る方法があるはずだ」と努力する方々が出てきた。これは言葉で表せば短い言葉であるが、そのための努力は苦汁に満ちたものであった。

遠く祖国を離れ合計 1000 名に足りない余りに小さな日本人社会、日本からの協力など思いもよらなかった戦中戦後の混乱期、1952 年の対日講和条約成立までは継続された敵性国民としての差別、また 1955 年の日本の戦後移住の再開後も、コルメナはいつも日本の移住行政の端に置かれた。

しかし、この果てしなく続いた努力はやがて現在のパラグアイにおける、日系人・日本人への信用と評価に変わって行った。

## 2) 校友の移住小史第一期（1956－1969 年）：

パラグアイへの校友生移住第一号は 1956 年（昭和 31）移住の服部孝治（農学昭 31 卒）で、パラグアイへの戦後移住再開後わずか一年の事であった。服部氏はその年の 3 月農大を卒業したばかりで、国家公務員上級の初任給が月 8 千円の時代にすでに給与 1 万 5 千円の職場が約束され、母校のそばには大学入学当事、親が土地を買いふるさとの大工を使って建ててくれた一軒家を持つという恵まれた学生であった。この境遇で親の反対を押し切り、頼るものもないパラグアイへ、また未知の世界へ、青雲の志をいだいての移住であった。

しかし、個人の移住の歴史は常に“意外”との遭遇である。独身移住の出来ない当時、彼はある家族の同伴者としてパラグアイ南部の移住地に移住した。彼が世田谷の一軒家を売って作った営農資金はその家長に預けたままで、それが再び彼の手元に帰ることはなかった。意を決した彼は移住地を飛び出し、手持ちのカメラを売って得た資金をもとに野菜の種と簡単な農具を買い揃え、当時のパラグアイ第二の町エンカルナシオンの町外れに畑を借り、野菜作りと収穫物の行商を始めた。

その後、彼は 1957 年には日本海外協会連合会エンカルナシオン事務所に職を得て、2 年間働くがやはり満足できない。1969 年にはメキシコにわたり校友の東信行先輩の紹介でアメリカ資本の 900 町歩の熱帯果樹園の管理を任せられるようになった。その後、アメリカ・フロリダにわたり技術の研鑽を積むが、1961 年暮れには彼はパラグアイに戻って来た。

彼はパラグアイで 1962 年には国際連合下部組織の FAO 職員に採用され、1976 年まで南米諸国を廻り仕事をするようになる。1977-78 年には JICA 専門家、1979-90 年には世界銀行のプロジェクト・リーダーとして働き、その後、独立して植林とその材木を使つての木工所、その他果樹園の営農を行うことになる。

この校友移住第一期の間、パラグアイへの戦後日本人移住地は戦後初めのチャベス国際移住地 (5500 町歩)、その後のフラム・ラパス・サンタロサ移住地 (16000 町歩) のほかに、1960 年のピラゴ移住地 (85000 町歩)、1961 年のイグアス移住地 (95000 町歩) が開かれ、本格的な移住者受け入れ体制ができて行く。

しかし、日本からの移住家族数は 1961 年の年間 166 家族をピークに、その後の日本経済の高度成長と共に減少し、やがて 1980 年代には年間 29 家族以下の移住者に減少してゆく。

### 3) 校友の移住小史第二期 (1970-1999 年) :

パラグアイの校友移住小史第二期は母校農大に 1955 年 (昭和 30) に新設された農業拓殖学科の卒業生たちを中心に切り開かれて行く。この時期に移住した校友の数は 15 人を超えるが、この校友も大きく二つのグループに分けることができる。一つは農業拓殖学科初代学科長・杉野忠夫先生を慕い、共同農場「杉野農場」を築こうとして移住したグループで、あと一つのグループはそれぞれ独自の夢を追い求めた人々である。

#### A) 杉野農場の仲間たち :

1970 年、横田善則氏 (拓 7 期、1 年海外研修後、昭 42 卒) が夫人と二人でイグアス移住地に入植する。彼は杉野農場グループの先鋒であり、あとには 10 人近い同志の想いが続いていた。彼が杉野農場の礎として選んだ土地は、巾 10 メートルほどの赤土の幹線道路のほかは、どこを見ても太古のうっそうとした原始林であった。その道の両側には原始林がそそり立ち、昼、空を見上げるためには顔を 90 度上に向けねば見えず、夜道を歩くのには夜空に星さえあれば、懐中電灯はいらず、上を見上げれば無数の星でできた細い天空の道が進む方向を示していた。

杉野農場の営農の中心は肉牛の繁殖・肥育と決めたが、それにはまず原始林を開き、山焼きをした後に、生活のために必要な飲み水を得るための井戸を掘らねばならない。それまでは一番近い 3 キロ離れた開拓者の庭の片隅に移住事業団から移動小屋を借り仮住まいとし、そこから毎日通った。

山焼きしたあと地は屋敷に使う場所以外はすぐに牧草の種を蒔かねばならない。時期を逃すと焼畑は再生林となり、原始林よりたちが悪い。牧草が育

つ前に、牧草地を守る針金の牧柵で囲まねばならぬ、牧柵に使う杭は山焼き前と山焼き後の山から伐り出さねばならない。将来のためには良い種牛も肥育牛も購入せねばならない。

自給用の野菜も栽培せねばならない。来年来る予定の後続者のための家も建てねばならない。毎日の食事の材料を買う買出しもある。そのついでに日本の仲間に手紙を出さねばならない。開拓とはなんと多くの仕事があることか！

たまの大雨には「百姓の雨正月」でホット息休めをする、入れ替わり、立ち代り後輩たちが遠くイグアスまで実習に来てくれて助かる。彼らの泊まる場所は、本人が仮住まいに使った木造の移動小屋だ。たまには実習生に肉を腹いっぱい食べさせてやりたい。

しかし、当面の資金源はわずかな携行資金と、原始林から伐り出す有用材の販売だけだ。資金が十分なら多くの人夫を雇い、開拓の時間を短縮出来る、それでなければ少ない人手で時間をかけねばならぬ。あっと、いうまに一年が過ぎて行く。

1971年、柴田隆一氏（拓10期・昭44年卒）が後続一番手として、夫人と一緒に移住地に到着した。彼の役目は肉牛が金になるまで野菜作で資金を作ることだ。まず、野菜作りの先達に現地農法を聞くところから仕事は始まる。市場は300キロ離れた首都のアスンシオン、栽培するのは消費の多いトマトとピーマン、栽培時期は首都近郊の野菜農家が気温の高さから作りづらい夏場だ、霜が降りる冬にはイグアスでのトマト作は不可能だ。

苗場作りから仕事が始まり、播種が終わり定植地への元肥施肥が終わる頃から、移植、定植、支柱建て、ひも結び、繰り返す消毒、摘芯・誘引と休む間がない。

収穫に入れば、農場の全員が総出で収穫、箱詰めにかかる。週に三回の出荷、最盛期には夜中までトマトの箱詰めにかかる。翌日、集荷のトラックにトマトを積み込むとホットする。しかし、雨が降ると赤土の幹線道路にはトラックが入らない。農場から3キロ離れた舗装された国道まで耕運機で運ばねばならない。二人、三人がかりで集荷時間を気にしながら、泥にまみれて運ぶ。集荷時間に間に合わねば大変だ。

移住地の気候や食べ物、人夫のあつかいに慣れ、コロニアの年中行事にも慣れてくる頃には、そろそろ二世の誕生が近づいて来る。さあ、仕事にも力が入る。

1972年には後続第二陣、久保田洋史氏（拓9期・1年国内研修・昭44年卒）が夫人と移住してきた。彼は当面はアスンシオンに残り、仲間の都市での拠点作りを担当することになった。彼は当面の生活の糧として、趣味の写真の技術を生かして写真店を開くことになった。夫人は頼まれて、新しく開かれた日系幼稚園の先生をまかされた。

1973年には後続第三陣、佐々木隆夫氏（拓11期・昭46卒）と江藤琴自氏（拓14期・昭48卒）が共に単身で移住してきた。佐々木氏は卒業後、杉野農場で役立てるため九州の畜産試験場で繁殖の勉強をして来た。江藤氏は移

住の前年、短期実習でパラグアイに来ていてアスンシオンの商業に興味を持ったので、町に残り独立の道を求めた。

1974年には後続第四陣の合田義雄氏（拓10期・昭和44卒）が単身で移住してきた。彼は農場の経理部門を担当しながら、新しい営農部門の大豆・トウモロコシの雑作部門を担当することになった。

1975年には最終の後続陣として堤広行氏（拓11期・1年海外研修・昭46卒）が和子夫人（栄養学科、昭49卒・旧姓堀内）を伴い移住、また単身で伊藤了三氏（拓13期・1年海外研修・昭48卒）と大越智恒和（拓14期・昭48卒）も移住してきた。堤氏と大越智氏は野菜作り、伊藤氏は雑作部門を担当するためだ。

特に堤氏と伊藤氏は在学中の海外研修でパラグアイ農業の実際を自分の目で確かめた後の移住であった。これでメンバーは全員そろったことになる。

全員そろったところで大車輪と言った所だが、やはり、移住は“意外”との遭遇である。五年かけて全員がそろったわけだ、色々と準備が出来た利点はあるが、開拓と営農の経験に違いが出来てしまった。そこからおのずから各人の考え方にも違いが出てくる。また、仲間の家族構成にも大きな違いが出てきた。

営農の実態を見ると、肉牛ではまだまだ繁殖中心で、多くの肥育牛を飼育するには牧草地の拡大がもっと必要だ。そのためには牧草地の拡大がもっと必要だ。そのためにはもっと資金が必要になってくる。

大豆・トウモロコシ作から十分な利益を上げるには、かなりの面積の山伐り、山焼き、山焼きあとの整理、出来ればブルドーザーによる抜根と整地が必要で、トラクターはじめ大型機械も必要になってくる。

天候に左右される野菜作りと有用材の販売だけでは、仲間の生活費は捻出出来ても生産基盤拡大には間に合わない。携行資金も若い彼らで準備できる金額はたかが知れている。開拓と営農に疲れが出てくれば、事故も出る。構成員の中から杉野農場の外に出て、独自の道を歩もうとする人が出てきた。

1974年には佐々木氏がアスンシオンに出て行った。1975年には合田氏が患った急性肝炎の療養のため、アスンシオンに出て行った。その年、江藤氏は日本に引き揚げて行った。1976年、柴田氏が近郊野菜作りを目指して、アスンシオン近郊に出て行った。

入れ替わりに、久保田氏がアスンシオンからイグアスに帰り、独自の農場建設を目指した。堤氏と伊藤氏は二人だけの新しい共同農場を開くために出て行った。大越智氏は自分の納得の行く移住地生活をするため、一人暮らしを始めた。ただ、横田氏のみが「杉野農場」発祥の地に残った。

他人から見れば「杉野農場、解散！」であった。事実、解散であった。しかし、その解散は各々が霧散、蒸散、無に帰した解散ではなかった。各々が独自の力を最大限に発揮するための解散であった。一人になったとき、裸になったとき、失う名も実も無いとき、人はその力と智恵を最大限に発揮する。

幸い彼らには若さがあった。現実を直視する勇気と智恵もあった。「耐え難きをたえ、忍び難きしのぶ」農大精神もあった。実際、農大入学当初、先輩方から無理やり暗記させられたさまざまな「農大精神」なるものが、現実の社会に生きるとき、これほど身に染みて、また繰り返し脳裏に浮かんで来るとは思いもかけなかった。

杉野農場を離れたおのおのはその後の四半世紀、農業拓殖活動を自分自身の人生とするための努力を繰り返した。パラグアイに残ったものたちはパラグアイの遅れた経済・社会に悩まされはしたが、反面容易に独立できるという幸運もあった。

日本に帰った方々の苦労は推測するだけで、語ることはできない。ただ、残ったものたちに言えることは、杉野農場を離れたのちも、農業拓殖の同志としてもお互いの心のつながりは異国での孤独感を慰めた。しかも、それは単に友が親・兄弟の代わりをただけではなく、お互いの人生と人格を高めるため切磋琢磨しあうという、何物にも換えがたいものであった。それ無くして、彼らがそれぞれのパラグアイでの人生に満足することは無かったであろう。彼らのその後を簡単に見ると次のようになる。

佐々木氏はその後、ステビアの栽培と輸出を試み、それで利益を得ることは無かったが、輸入代理店を開始するきっかけとつながりをつかんだ。現在では独自の経営理念に徹したプラスチック原料の輸入代理店として安定した経営を維持しながら、アスンシオン郊外に果樹・野菜農園を開き経営の多角化を目指している。

合田氏は病が癒えたのち、日系農協に参事職で迎えられ、十年近く日系農協の発展につくし、現在ではアスンシオンで小さな輸入卸・小売店を自営している。

柴田氏はアスンシオン近郊の野菜歩合農からはじめ、現在では近郊に三箇所の農場を持ち栽培をするまでに至った。彼の栽培技術の高さと有機農法は多くの人の認めるところで、人に請われての技術指導を良くし、また近郊日系農協の組合長も務めた。

久保田氏は新しいイグアスの環境で山焼き・整地の開拓生活から始めた。営農も野菜作りから始まり、イグアス唯一の果樹専業農家を経て、その後、雑作専業農家に再度転換した。現在では 300 町歩の大豆・小麦栽培を実現し、社会的にもイグアスの日系農協組合長、ならびにパラグアイ日系農協中央会会長の重責を務めている。

堤氏と伊藤氏の共同経営では野菜作りと平行して、雑作も導入された。伊藤氏は 5 年間の開拓・営農生活の後、日本の実家の都合で帰国した。その後堤氏は一人でがんばり、現在では 160 町歩の雑作とメロンなどの野菜作、台湾桐の植林などを経営している。校友の和子夫人は 1986 年から移住地の日本語学校教師に迎えられ、現在その「教頭」と地区婦人会会長の要職にある。

大越智氏は考えるところがあり一人、人里離れた原始林と小川のほとりに小屋を建てて住み、蝶々採取、読書、自家用野菜の栽培、あとは思索にふけた。一年後に自分の農地を日本人会に寄付して、日本に帰って行った。

横田氏はひとり「杉野農場」に残り、肉牛経営を維持しつつ自給自足を基礎にした小農経営を目指した。また子供たちの教育に意をそそぎ、不十分な移住地の現地教育からアスンシオンの国立大学にストレートで子供たちを入学させるという例外をいくつも実現させた。現在では特技の整体術で移住地の方々の体を治しつつ、町に出た子供たちと仲間たちがいつでも帰れる「心のふるさと」造りにイグアスで励んでいる。

B) それぞれの夢を求めた人々：

杉野農場の発足に少し遅れ、イグアスに移住して来た校友たちがいた。大西省三氏（拓 16 期・昭 50 卒）は 1975 年にコロニアにある箱根植木株式会社に、現地採用の職員として移住して来た。会社が目的とする植林事業の基礎を作りながら、1977 年には退職しイグアス日本人会が運営する日本語学校の校長先生に迎えられ、その後、学校を退き農業用資材店を運営していたが、現在では日本企業に就職しボリビアで働いている。

同じく 1975 年には渡辺光也氏（畜産・昭 50 卒）が JICA 八ヶ岳訓練所を終えて、イグアスの移住者のもとに雇用青年として移住して来た。彼は二年後には当初の雇用先を出て、箱根植木で働くことになる。その後、1981 年まで植林の仕事を手伝いながら、自分の農地を手に入れる準備をしていたが、ついに土地の入手が実現出来なかった。

結果、彼は 1983 年には移住地を遠く離れて日系人の分益農となり、将来の独立に備えることになった。しかししばらくして、彼はその地で突然の不慮の死にいたった。校友たちは驚き、遺体を移住地に引き取り、日本の彼の実家に連絡し、移住地での葬儀・埋葬に全力を尽くした。

校友達は「私たちにもう少し、彼を見守る余裕があったなら！」と悔やんだ。物静かで目立つことの少ない校友であったが、「乾パンをかじっても、自分の独立資金を貯金する」意志の固い男であった。移住地の音楽会で見事なケナー演奏をして、皆を驚かせた男であった。校友で一番若い彼が、パラグアイに移住した校友の物故者第一号となった。

日本から実兄がすぐに飛んで来られた。日本で使われた彼の遺影と同じ遺影を校友が使っており驚かれていた。校友の協力で立派な墓が作られ、横田氏が管理してくれている。

1976 年に塩水流隆道氏（拓 16 期・昭 51 卒）が箱根植木で働くため、イグアスに移住して来た。彼は持ち前のバイタリティーで不十分な環境をものともせず、1983 年に会社を辞めるまでに移住地で合計 200 町歩のアメリカ松とパラナ松の植林を実現した。その面積は松の植林としてはパラグアイ最大のものである。それも太古の原始林を開いての植林であった。

彼はその実績を認められ、JICA に植林専門家として迎えられ、その後、ペルー、パラグアイ、ウルグアイと専門家として回り、現在はまたパラグアイのプロジェクトに参加している。彼が実現した植林地では現在、間伐材を利用した製材が行われている。

1977年には戸田弘氏（林学・昭47卒）が夫人をとめない移住して来た。彼は一時期、JICAの出資したCAICISAに就職して植林を担当していたが、5年ほどして日本に引き揚げて行った。

1979年に佐藤健次氏（拓14期・一年海外研修・昭49卒・卒業後青年海外協力隊）がCAICISAで働くために移住して来た。CAICISAでは原始林の機械抜根のあと地に、油桐を植林・栽培する部門を担当していた。4年後には日本に帰ったが、その後JICA専門家に採用され南米を中心に働いている。

1990年に村井明氏（拓26期・昭60卒）が単身で移住して来た。彼は1985年にパラグアイで農業実習をし、日本に帰国後JICA開発青年制度でブラジルに派遣され研修をしていた。しかし、研修後の独立の場所としてブラジルではなくパラグアイを選んだ。彼は現在100町歩の雑作を営んでいるが、彼がパラグアイでは最後の校友生の移住となっている。

C) 校友の移住小史第三期（2000～ ? ）への展望：

校友移住の今後の展望を第三期とすれば、どのような展望が予想されるであろう。第二期の最後の二十年間には、村井明氏以外の校友の移住は無い。これは日本経済が世界にその優位性を示した時期に、何を好んで経済的に貧しく、社会的に不安定な南米パラグアイに移住するような校友が居るはずは無いと考えれば納得は行く。このまま校友のパラグアイへの移住は終わるのであるか？

しかし、日本経済もかつて躍進の絶頂期は過ぎ、いまや停滞の時期にある。日本で住んでいる方々の幸福感・満足感も外から想像するほどは高くは無いようだ。今でもドイツやスイスのヨーロッパからパラグアイに移住して来る人をいるのを見ると、パラグアイや南米の魅力はゼロでは無いようだ。「美は乱調にあり！」ではないが、日本の校友が新しい感覚で移住して来る可能性も考えられる。

幸い母校では、農大創立100周年の歴史をふまえ、次の新しい世紀に向かい大改革を行った。その改革の中には、大学2年生で外国の実態に触れる機会のある「生物企業情報学科【現在の国際バイオビジネス学科】」も出来た。新しい校友諸君の活躍を期待したい。

またこの「生物企業情報学科」には南米の校友会支部の推薦留学生が受け入れられるようになった。これまでの南米諸国から農大への短期留学、当地大学卒業後の留学に加えて新しい形の留学が始まった。

今後は若い頭脳が4年間、母校東京農大で完璧な大学生活を送ることが可能になる。この「二重国籍」を持ったような、「移住する前に、移住していたような」新しいタイプの校友の今後に期待したい。【1999年に初回の留学生を送り、2012年までに13名、2016年まで16名の留学生を送っている。】

D) パラグアイ及び校友会パラグアイ支部と母校とのつながり：

移住以外の目的でパラグアイを訪れた校友および教職員の数は、校友会が発足した1978年から1997年8月までに延べ211名にのぼる。その中には母校の理事長、学長などの教職員が60名、大使館・JICA職員ならびに短期ミッ



ションで派遣された校友が 38 名、JICA 専門家、海外青年協力隊ほか開発青年として滞在した校友が 49 名、個人調査で 19 名、校友、学生の海外実習が 8 名、その他 37 名となっている。その構成を見れば、いかに多くの機会をとらえて母校の教職員の方々がパラグアイを訪れ、我々校友を励ましてくださったかが判るであろう。

1978 年以前の校友及び教職員のパラグアイ訪問はわずかな例しか、我々には判らない。たとえばパラグアイの戦後移住が再開された直後 1956 年には、尾上忠一氏（昭 13 年専農卒・現校友会神奈川県支部長）が神奈川県海外協会の仕事でパラグアイを訪れ、チャベス移住地に入植された母県移住者の仮小屋に泊まれ、移住の現状視察をされている。

1958 年には母国農業拓殖学科の初代学科長・杉野忠夫教授が拓殖学科卒業生の今後の活動分野を調べるため、移住者の引率を兼ねパラグアイの移住地現状視察に訪れている。当時、エンカルナシオンにいた服部孝治氏が杉野教授を日本人ならびにドイツ系の移住地に案内している。その頃、パラグアイ第二の都市エンカルナシオンにタクシーは一台しかなく、同氏は教授を馬車に乗せて案内したと聞く。

そのほか、1978 年の校友会発足以前には武正総一郎氏（元校友会会長）、松田藤四郎氏（当時助教授・現農大理事）、前山茂氏（元農大理事）がパラグアイを訪れている。

我々校友にとって記念すべきは 1978 年 8 月 9 日の金木良三教授と松田藤四郎教授のパラグアイ訪問であった。この歓迎会の席で両先生から勧められ、出席者一同が賛同して校友会パラグアイ支部が発足した。このとき、両先生からいただいた US250 \$ が支部会計の入金第一号である。翌 1979 年からは校友会本部より支部交付金をいただいている。

この時期の校友の生活は移住小史第二期に見られるように、まだまだ不安定なものであった。しかし、校友会発足当時の支部会費は年間 3000 グアラニー（現地通貨）で、この金額は当時の為替換算で US22 \$ に相当した。現在（1999 年）の会費 50,000 グアラニーが換算して US17 \$ である事を思えば、いかに高い会費であったかが判る。

この会費のほかに 1980 年からは特別事業として将来、移住地の校友子弟がアスンシオンで寄宿しながら通学出来るための校友会館用地購入資金の積み立てが始まった。金額は年間 2000 グアラニーであったが、会費とあわせて年間 5000 グアラニーの金額は当時の校友にしては大金で、この金額を毎年ではなく、経営が安定してから数年分まとめて払った校友も何人かいる。

しかし、その成果として 1984 年には会館建設用地 554 平方メートルが購入された。この購入資金の中には校友会支部設立当時、高知県からイグアス移住地に派遣されイグアス日本語学校の校長をされていた立田氏（前校友会高知県支部長）、1980 年にパラグアイを訪問された津川安正助教授はじめ、当時パラグアイに滞在された多くの校友からのありがたい寄付金も含まれていた。その後も、積み立ては建築資金を目的に継続されて行く。

1986 年にはより立地条件の良い新しい 789 平方メートルの会館建設用地が購入され、建築資金の積み立ても進んでいた。この校友会支部の自助努力が

認められ、1986年12月には母校より700万円、校友会本部より121万円、合計821万円の会館建築資金が支部に寄贈された。

そして翌1987年12月29日には会館落成式が行われ、その式典には隣国ブラジルの農大会会長・松田昭次郎氏、母校農大より伊藤澄磨教授（柔道部部长）、柔道部師範、監督と部員、総勢21名が出席してくれている。

会館落成式の後、柔道部一行はパラグアイ柔道部連盟の会員と柔道の親善試合、師範により模範演技などを行いパラグアイ関係者との交流を深めた。この1987年には校友会パラグアイ支部は社団法人として公認されている。また1989年にはパラグアイ支部は、イグアス移住地のなかに25町歩の土地を将来の植林用地として確保している。

その後、1994年11月には訪日中のパラグアイ共和国大統領・ファン・カルロス・ワスモッシ氏が母校東京農業大学で名誉農学博士を授与され、大統領の帰国後、1995年3月にはアスンシオンにおいて、校友会と日系団体合同の合同祝賀パーティーが開催された。

また1995年3月には伊藤澄磨教授より13台の顕微鏡が当国研究機関に寄贈された。また同年8月には母校の松田藤四郎理事長と小野功教授がパラグアイを訪れワスモッシ大統領を表敬訪問し、アスンシオン国立大学で特別講演を行っている。その後も1997年8月には母校より国立大学農学部で顕微鏡・PHメータ・測定天秤など41点の実験器具が寄贈されている。

同じく1997年には校友会支部創立20周年を記念し、校友会館の増改築が行われ（1995年に第一回改修工事実施済み）、同年7月29日に農牧大臣をはじめ現地関係者、日系諸団体、関係者を招き記念式典が行われた。その式典にはパラグアイ在住の全校友が出席したが、校友会館に寄宿して大学に通う寮生12名も参加し花を添えた。母校からは出席者全員に記念品もいただき、またかつてパラグアイに在住された多くの校友からも多くのご祝儀をいただいた。

おわりに：

以上、述べてきたように、現在の校友会パラグアイ支部は決して移住して来た二十人以下の校友だけで作り、育てて来たものではありません。この支部はいつも私たちと共に支部の会員名簿に名を連ねてくださった、パラグアイに短期、また7年の長期にわたり滞在された校友の皆様、パラグアイ訪問の際、支部を訪れてくださった校友の方々の支援のお陰であります。またそれにもましてこの小さな国、その小さな支部に絶大なる支援を賜りました母校東京農業大学と校友会本部の歴代の皆様、これらすべての皆様の熱い思いで私たちと校友会支部は育てられて来ました。私たち支部会員はそれらの全ての方々に心から御礼申し上げますとともに、任せられている責任を重く感じるものであります。

最後に支部会員の子弟について一言申し上げます。現在、高校を卒業した子弟・農大二世は23名います。そのほとんどは大学卒・大学在学中です。なかには三名の大学院卒・在学中もいます。また、移住地出身の校友子弟は全員、校友会館のお世話になりました。

農大子弟の職業は農業、会社経営、公務員、教師（その後、中央銀行職員、大学講師もいる）などさまざまです。彼らは今後の校友の仕事に大きな助けになると思います。また彼等農大二世が今後のパラグアイ日系社会、パラグアイ社会、ひいては母国日本のために良き働きをしてくれる事を祈ります。また、彼らに校友の皆様の温かいご指導、ご支援をお願いいたします。

以上

=====

## 第2部 (構想)

- A) 2000年第4回パンアメリカ校友大会のパラグアイ開催：
- B) 特別留学生の動向：
- C) 時の経過とともに：
- D) 校友会館のあり方：
- E) 2018年南米東京農大校友懇親会の開催：
- F)
- G)